

美馬中学校 「学力向上実行プラン」

研究テーマ

- ①「主体的に学習する力を伸ばす授業づくり」
- ②「学校と家庭との連携による家庭学習習慣の確立」

学力向上検討委員会構成

学力向上推進員 委員
武岡 美智
校長：小笠原 仁美 副校長：江藤 将 教頭：小田 直人 教務主任：宇山 壮史
1学年主任：大野 俊介 2学年主任：武岡 美智 3学年主任：佐藤 茂樹
特別支援コーディネーター：浅野 理恵

校長

小笠原 仁美

(1)基礎的・基本的な知識・技能の習得

児童生徒の状況	具体的目標(目指す子供の姿)	成果指標	中間期の見直し	取組状況	達成状況
よさ 国語科は、ほぼすべての領域において県平均を上回っている。また、数学科の「数と式」の範囲の「技能」の領域については、優れている生徒が多い。	①家庭で宿題や授業の予習・復習が毎日継続できる。 ②授業の準備ができ、見通しをもって学び、振り返りができる。	①学校アンケートで、8割以上の生徒が「家庭学習の習慣」が定着したことを実感する。 ②8割以上の生徒が、授業の内容がわかったと実感する。		小学校と連携し、また校内での「家庭学習ノート展」を開催し、充実した家庭学習をしている児童・生徒の自主的ノートを掲示することで、中学生としての自覚を促すとともに、家庭学習の効果的な方法を学びやすとした。 ※23%の教員が、授業時に「目標」を提示し、授業の見直しをした。	・学校アンケートで、86.5%の生徒が家庭学習の習慣が身に付いたことを実感していた。また、93.2%の生徒が「毎時間の授業の内容がわかった・大体わかった」と回答した。
課題 家庭学習の習慣が定着し、基礎的・基本的な学力が定着している生徒と、それらが不十分な生徒との差が大きい。	①提出している宿題の可視化と、モデルの提示をする。 ②「家庭学習の友」を有効に活用する。 ③授業の中で、ホワイトボード等を使って生徒同士が教え合う場を設ける。	①充実した家庭学習をしている生徒の実践を適宜提示する。 ②授業の中で生徒同士が教え合う場を意識的に設ける。		次年度における改善事項 ・本年度は92.9%の教員が授業の始めに「本時の目標」を提示し、57.1%の教員が授業の終わりに「振り返り」の時間を設定したが、いずれも前年度より低くなっているため、次年度は改善したい。 ・すべての教員が、生徒の学習規律を定着させるよう意識して努めたため、次年度に繋げたい。	

(2)知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等の育成

児童生徒の状況	具体的目標(目指す子供の姿)	成果指標	中間期の見直し	取組状況	達成状況
よさ 相手の話の意図を考えながら聞いたり、相手にわかりやすく伝えよう工夫して話したりすることができるようになってきている。	①話し手の意図を考え自分の考えと比べながら聞くことができる。 ②目的に応じて自分の考えを根拠を明らかにしながら、表現を工夫して話したり書いたりすることができる。	①8割以上の生徒が、話し合い活動を通して自分の考えが深まったことを実感する。 ②毎日1回は自分の考え等を表現する機会を設ける。		・8割以上の教員が、積極的に発言したり話し合ったりする際、授業の中で生徒が主体的に活動する機会を積極的に設けた。 ・小中合同の授業研究会を開催したり、年々「校内公開授業週間」を設けたりして、互いの授業向上に努めた。また、中学校の教員や生徒による、小学校への公開授業を本年度も実施した。	・88.8%の生徒が、「授業の中での話し合いや教え合いを通して、自分の考えが深まった」と実感している。また、87.1%の生徒が、「根拠をもとに自分の考えを話したり書いたりするようになった」と回答した。
課題 授業の中で、進んで発表したり、わからないところを質問したりする生徒が少ない。	①すべての教科でペアワークや話し合い等を取り入れた学習活動を行う。 ②生徒が主体的に取り組むための授業方法について、小中合同の授業研究会や、小学校への生徒や教師による出前授業を実施する。	①毎日1回は生徒が自分の考えを述べ合い表現する場面を設定する。 ②小中合同の授業研究会を実施し、生徒が主体的に取り組む授業方法について研修する。		評価 B ・本年度も、小中合同の授業研究会や、生徒による絵本の読み聞かせ、中学校の教員による出前授業を実施し、小中間の連携を図り学力の向上に努めた。次年度もこれらの取組を継続すると共に、「主体的・対話的で深い学び」のできる授業をめざした取組に努める。	次年度における改善事項

(3)主体的に学習に取り組む態度の育成

児童生徒の状況	具体的目標(目指す子供の姿)	成果指標	中間期の見直し	取組状況	達成状況
よさ チャイム着席ができ、学習のきまりをよく守り、落ち着いた雰囲気での学習ができる。	①短期的、長期的な自分の目標を決めて、小さな努力を続けることができる。 ②わからないところを自覚し、自ら解決しようとする。	○7割以上の生徒が、目標をもち努力を続けることで、自分が成長したと実感することができる。		・毎月「家庭学習のびき」に月目標と振り返りを記入させ、担任が目を通した。また、定期的に学年ごとに学校長も目を通し、生徒一人ひとりにメッセージを贈ることで、学習や生活習慣の目標設定や振り返りができるようにした。	・68.3%の生徒が、学習や生活面で何か目標をもって努力できた実感している。また、79.3%の生徒が、目標設定や振り返りに「家庭学習の友」が役立ったと感じている。
課題 指示されたことに対しては真面目に一生懸命取り組めるが、自ら考え主体的に行動できる生徒が限られている。	①「家庭学習の友」を活用し定期的に記入させ、チェックし、適宜アドバイスをする。 ②小中連携して「家庭学習強調週間」や「自主勉ノート展」を設け、生徒への意識づけや良いモデルの可視化を図る。	○毎月1回は「家庭学習の友」の記入日とし、定期的に学習や生活習慣についての見直しと振り返りができるようにする。		評価 B ・目標をもって学習や生活ができたと感じている生徒は、本年度の「成果指標」である「7割以上」を達成することができなかった。しかし、ほとんどの生徒が、この1年間で自分なりに成長したと思うところを具体的に挙げることでできている。このことから、次年度の課題は、生徒に目標意識をもたせることであると考えられる。	次年度における改善事項

平成30年度 学力向上ロードマップ

